

## 特別講演要旨

# 歌を忘れたカナリヤに歌を思い出させるもの： マードックの道徳的实在論と文学

浜 野 研 三

哲学者としてのマードックが批判の対象としていたものは、実存主義とオックスフォードの日常言語学派である。彼女の批判の独創的で興味深い点は、対立こそすれまったく共通点などないように見える二つの哲学思想の中に、共通の問題点を

見出しそれに対する代案を伴った批判を行ったことにある。

日常言語学派と実存主義に共通する問題点とは、その中核的な人間像にある。それによれば、人間は自然科学が描いてみせるドライで客観的な

世界の中で自らの意志により決断をし、行動する存在である。このような客観性の理解や世界観・人間観は大事な概念や語彙が失われた結果であるとマードックは主張する。マードックの批判的の一つは、認識主体の関与があればそれは主観的でありしたがって正しい認識ではない、という科学主義的な狭い客観性の理解である。それに対してマードックは、主観が関与しつつ事実を正しく捉える可能性を認める、より広い客観性の概念を受け入れている。そのような広い客観性の概念の下に現れる世界は、自然科学が描くある意味で単純で理解しやすく思われる世界ではない。現実の世界は、美的な価値や道徳的価値を持っており、それらはきわめて複雑で完全性を有するものであり、有限な人間存在には、容易に把握しがたいものである。マードックはその側面を世界の密度の濃さ (density) と表現している。

しかし、われわれ人間は自らの肥え太った容赦のないエゴの力に容易に惑わされ、世界を単純化し、自分に都合がよいように理解しがちである。その結果世界を正しく理解するために不可欠な概念や語彙を失い、ファンタジーの中に生きることになる。このような忘却により豊かさを失った世界・人間理解に対して、マードックは、再び思い出すべきものを様々な形で述べる。

何よりもマードックが強調することは、人間の意識には常に道徳的次元が伴っていること、及びよき生にとっての道徳的な徳の涵養の大切さである。それに関連してマードックは、シモーヌ・ヴェイユの影響の下、注意の大切さを強調し「愛情に満ちた公正な眼差し」などの表現を用いて、より具体的な説明を試みている。エゴの惑わしに負けることなく正しい認識を得るためには、このような眼差しを持つこと、そのための絶え間のな

い努力が不可欠なのである。

正しい理解を得る努力は善・完全性を遙か彼方に仰ぎ見ることにより促されるとともに、自己の現実との落差をも感じざるを得ない。ここで注意すべきことは、マードックが語る超越的な善・完全性は、われわれの経験的世界を超えたものではないことである。通常の意味で形而上学的なものではなく、あくまでわれわれの経験の世界に属しつつ、そのあまりの完全性・至高性のゆえに超越的なものと呼ばれているのである。自己にとって、他者そして自己自身も不透明・不分明な存在であり、その正しい認識は、非常に困難なのである。「超越性」は、上で述べた人間の有限性に根差すべきものとの落差の痛切な自覚に基づく表現なのである。

以上のようなマードックの立場からは、自由は日常言語学派や実存主義とは異なったものとなる。すなわち、現実をより正しく理解するとき、自ずからいかに行動すべきかが決まってくる時、人は自由なのである。自由は、自律的な意志の決断などとはおよそ異なるものとして理解されるのである。

さらに、私の解釈では、マードックは、エゴの誘惑を退け密度の濃い現実をありのままに理解し描くために、道徳的価値評価と記述的要素が分かちがたく結びついている二次的価値語 (secondary value word) と呼ぶ語彙を駆使し、複雑な世界や人間同士の関係や繋がりを描こうとすることに文学の課題と目標があると述べている。このようなマードックの主張は、価値と事実の峻別を否定する議論を先取りした独創的なものであり、マードックの文学が目指すところを示すものであると言うことができる。

(関西学院大学教授)